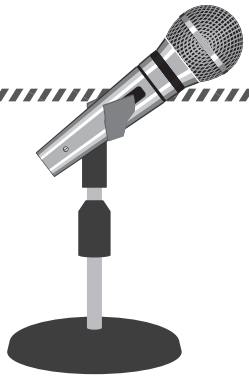


伝統のホームカミングデー　式典総合司会

初の学生抜てき
好評だったアナウンス研究会2人

卒業生最大の祭典『ホームカミングデー』（10月7日・多摩）式典の総合司会が初めて学生代表となり、中央大学アナウンス研究会（学友会学芸連盟）の2人が大役を務めた。

伝統の式典、司会に抜てきされたのはアナウンス研究会（以下、アナ研）で、ＭＣ（master of ceremonies）の経験豊かな崎田航平さん（法３）とアナウンスチーフの上谷留佳（かみやるか）さん（文３）。

式典当日の午前10時、約2200人収容の９号館クレセントホールはほぼ満員だ。客席に笑顔が並び、年に１度、ＯＢ・ＯＧらが集う卒業生最大の祭典を楽しみにしている様子がうかがえる。

「お待たせしました」。崎田さんのアナウンスが流れると、場内が沸き上がる。

「ただいまより、第27回中央大学ホームカミングデー『式と音楽の祭典』を開会いたします。私は司会進行を務めさせていただきます、アナウンス研究会、崎田航平です」。「同じく、文学部３年、上谷留佳です」

司会進行の崎田さん（左）と上谷さん

２人のステージが始まった。今回注目の第２部・白門音楽祭、３団体によるハーモニーの競演を紹介し、第１部の式典へといざなった。

応援団がリードする校歌斉唱では「元気よく歌いましょう！　中央大学校歌！」と語尾を上げて明るさを演出。学長らによる挨拶への案内では、落ち着いた語り口で登壇者のフルネームをはっきりと伝えた。

挨拶が終わると「ありがとうございました」と礼を述べる。このとき、鼻濁音の「が」と「ご」を意識した。

アナウンス技術の一つで、濁音が発生させるきつい印象をまろやかにする。

崎田さんが心掛けたことは「ゆっくり話すようにしました。聞きやすいと思います」と基本を忠実に。

上谷さんは基本を土台にした応用編。「アナウンスをしないときは下を向かず、会場を見ていました。台本をめくるときは静かに。音がするとマイクが拾ってしまいます。めくったページが司会台からはみ出さないようにもしました」と姿、形にもこだわった。

沈着なアナウンス、メリハリをつけた進行で、式典は親子三代表彰、白門音楽祭、卒業後50年記念撮影と予定通りに展開され、同11時半過ぎ、無事終了した。

終了直前には「ここまで司会を務めましたのは～」と再び自己紹介した。終演をテンポ良く伝えた。

オープニング、中大応援団リードによる校歌斉唱。
司会の２人はステージ右端にいる

司会進行に若者の香り

会場にいた卒業生の一人、中大学員会流山白門会の高橋洋支部長は感心していた。「新鮮で良かったですよ。希望に燃え、一生懸命、明日に向かって取り組んでいる若者の香りが伝わってきました」。学生による初の司会進行は好評だった。

開始２時間前の同８時過ぎ、会場入りした２人の顔はこわばっていた。「入場者がだんだん多くなってくると、式典の重みを感じました。学生相手のイベント司会とは違う。どうすればいいんだ…」（崎田さん）、「私は声がかれてしまって、あせってパニックになっていました」（上谷さん）。

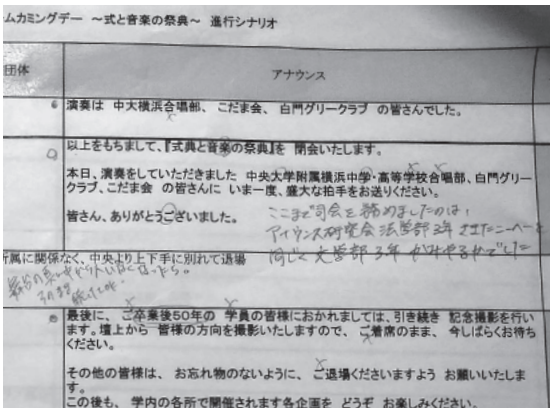
４時間後には、過去に経験したことのない大きな喜びに包まれた。「重大な式典というのは分かっていましたが、体験してみると想像を超えた大切な仕事でした」（上谷さん）、「これはアナ研の大イベントになる。今後も活動の機会をいただけるのなら、部員の意識が高まります」（崎田さん）。

２人はアナ研のメンバーに任務完遂の大感動を広くアナウンスした。

ホームカミングデー主催部署から出演依頼を受けると、アナ研は蜂の巣をつついたような大騒ぎだったという。応募者多数、志願者続出。100人超の部員がいるなか、実力派の２人が厳しい内部選考を勝ち上がってきた。

実績のある２人とはいえ、当初は緊張していた。２人にエールを送る曲だったのか、白門音楽祭では「やってみよう」「未来へ」～附属横浜中学校・高等学校合唱部～が流れた。

近い将来、崎田さんはアナウンサーを目指し、上谷さんはナレーターや声優になりたいという。


ムカミングデー　～式と音楽の祭典～　進行シナリオ

団体	アナウンス
	演奏は　中大横浜合唱部、　こだま会、　白門グリークラブ　の皆さんでした。
	以上をもちまして、【式典と音楽の祭典】を　閉会いたします。 本日、演奏をしていただきました　中央大学附属横浜中学・高等学校合唱部、白門グリークラブ、こだま会　の皆さんに　いま一度、盛大な拍手をお送りください。 皆さん、ありがとうございました。
属に関係なく、中央より上下手に別れて退場	
	最後に、　ご卒業後50年の　学員の皆様におかれましては、引き続き　記念撮影を行います。壇上から　皆様の方向を撮影いたしますので、　ご着席のまま、　今しばらくお待ちください。 その他の皆様は、　お忘れ物のないように、　ご退場くださいますよう　お願いいたします。 この後も、　学内の各所で開催されます各企画を　どうぞ　お楽しみください。

台本には書き込みを入れて念入りチェック

進行を見守る司会者２人

アクシデントも味方に

上谷さんは体調不良で苦しんでいた。気を付けていたのに、当日の朝、声がかれている。のど飴を幾つもなめた。台本には急きょ、おわびのメッセージを挿入させてもらった。「声がかすれていて、お聞き苦しいかと思いますが、全力で頑張らせていただきます」。会場から拍手があった。「頑張れの意味だと思いました。温かい気持ちが伝わってノビノビとできました。ありがとうございました」と先輩たちに感謝した。

学生記者になりませんか？

『HAKUMON Chuo』は中大生が取材・編集する大学広報誌です。
現在、学部在学生を対象に学生記者を募集しています。

●元新聞記者のプロや先輩の学生記者に、取材方法・原稿の書き方をはじめ添削指導を受けることができます。将来どんなキャリアを目指すにも文章力が重要です！
●取材を通して、さまざまな人に出会うことができます。出会いの数ほど思い出ができることでしょう。
●記者活動を通してコミュニケーション能力など「社会人基礎力」を身につけることができます。

憧れの報道番組キャスター 中大4年生が日テレ「news zero」で奮闘中

学生記者 山田 亮太朗（法学部4年）

OG探訪

本職はシステムエンジニア プロダーツ選手 関根麻耶さんに迫る

学生記者　齋藤優衣（総合政策学部1年）

Column きのうきょう

実態のない世界を、どの目線から見つめるのか ～ネット社会 私なりの考察～

文&写真 学生記者 津田 翔（法学部2年）

Closeup クローズアップ

箱根駅伝予選通過に貢献

モチベーションビデオ制作奮闘記

FLPスポーツ・健康科学プログラム村井ゼミC生&学生記者 文&写真 五十嵐遥（法学部4年）

駅伝チームの練習を取材する筆者

OB探訪

剥製標本、骨格標本を請負製作する内田晃氏は中大理工学部卒

保存状態良ければ「100年、200年は大丈夫です」

学生記者　片桐将吾（法学部４年）

Column きのうきょう

僕と炬燵（こたつ）と画面の向こう側

学生記者 髙石航平（法学部4年）

【お申し込み・お問い合わせ】
中央大学広報室『HAKUMON Chuo』　編集担当：久保田茂信　Phone：042-674-2048（直通）　E-mail：hc@tamajs.chuo-u.ac.jp